

「患者」から自分を取り戻すためには 適切なサポートが必要

土橋律子
支えあう会「 」代表

私は、34歳から4度のがん体験を持つがんサバイバーである。自分が患者の立場に立ってみると、双方の立場を体験して痛感したのはお互いの認識の違いである。がん患者が望むのはもちろん「死にたくないから治して」だが、医療側の「治る」=患者が望む「もとの体や生活に戻れる」ではないことを、当事者は治療に伴う心身の痛みを通して否応なく実感させられる。切除された臓器は二度と戻らないし、失った機能が残存機能の中で整うにはかなりの時間や工夫がいる。外見は変わらずとも新たな体に馴染むまでの違和感や心の揺れは大きい。自分を見失いそうな時空を生きなければならない時間は辛い。がんと向き合って生きていく困難さをより強く実感するのは退院後の生活なのだ。些細な体調変化が再発・転移の恐怖を誘う。だからと言って「がん患者」のままではいたくない。たとえがんは持っていても、社会の中で一人の人間として最後まで自分らしく納得して生きたい。

がん患者から自分を取り戻す場所として、H6年に【支えあう会「 」】というセルフヘルプ&サポートグループを立ち上げ、分かち合いやがん相談、気功教室や勉強会・講演会、ハイキングや旅行などの親睦会、会報発行などを行い、退院後からの継続した相互支援を続けてきた経験から、今回のテーマに沿ってお話させていただきたい。